

◇特集〈広島／ヒロシマ〉をめぐる文化運動再考

山田かんとサークル誌

楠田 剛士

1

「広島／ヒロシマ」をめぐる文化運動再考」という特集の中で、主に長崎で活動した山田かんと、長崎のサークル誌「芽たち」を取り上げることが、一見テーマにそぐわないようにみえるかもしれない。しかし、広島の後文化運動との差異や共通点を明らかにすることで、長崎の運動の特徴をとらえることができるのではないかと考える。また、ひとりの詩人・批評家、ひとつのサークル誌ではあるが、原爆をめぐる文学的表現と文化運動を再問題化する上で、原爆文学研究と戦後文化運動研究とを〈合同〉して行うことができる格好の対象である。以上のような理由から、本稿では現時点での山田かんと「芽たち」に関する資料を整理・再検討し、今後の長崎における原爆文学／文化運動を考察する際の地固めを行うことを目的とする。

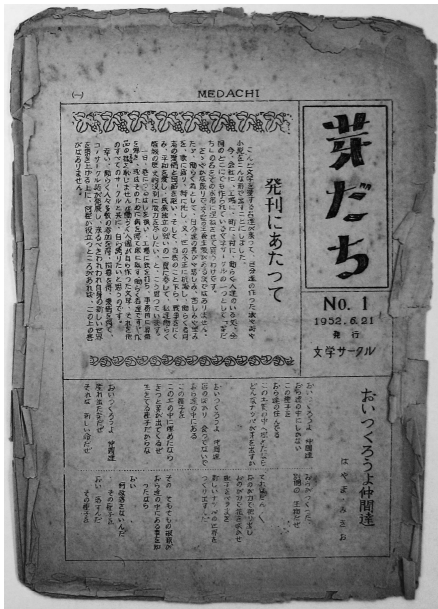
山田かんと「芽たち」に関する文献としては、山田かん『長崎・詩と詩人たち―反原爆表現の系譜』（汐文社、一九八四・十一、以下副題省略）、横手一彦「個と批評する言葉と科学性と……山田かん小論」（『敍説』一九九九・八）、敍説編集部「記憶の固執・

…山田かん氏に聞く」（同前）、横手一彦編「山田かん年譜」（同前）、「県内初期の原爆詩人たち」（『長崎新聞』一九八五・七・二十三、八・二、全十一回）、「座談会 長崎・反原爆表現運動の軌跡―「芽たち」の歩みとその後―」（季刊・長崎の証言）¹、一九七八・十二）などがあり、当事者による談話や記録は貴重な資料である。これらを参考にして、ひとまず、基本的な事項からおさえていこう。「芽たち」は一九五二年六月二十一日に創刊された。巻頭に置かれた「発刊にあたって」は次のように述べている。

こんど文学を愛する者達が集って、自分達の作った歌や詩や小説をこんな形で出すことにしました。／今、会社に、工場に、町に、村に、働らく人達のいる処、全国のどこにでも作られている文学サークルの一つとして「芽たち」の名をその末席に連ねさせて貰うわけです。／さ、やかな祭りで、云う程の主義主張がある訳ではありません。たゞ、働らく者として、自分達の喜びや悲しみ、苦しみや望みを、歌に盛り、詩に託し、又、世の不正に抗議し、働らく者同志の愛情と団結を謳い、そして、当然のこと乍ら、戦争をにくみ、平和を愛し、民族独立の戦いの一翼に参じて、私達働らく階級の歴史的役割に微力を尽したい、と、こう思っています。／一日、巷につるはしを振り、工場に鉄を打ち、事務所に算盤を弾き、或はそのために病を得て床に臥す、働らく者達です。作品の拙さを恥じません。働らく人間が自ら作った文学、それを他のすべてのサークルと共に、自ら誇りたいと思うのです。／幸い、働らく人々多数の参加を得、指導を得、愛情を得て、ママサークル誌が発展し、来るべきわれわれ自身の新しい世

界を築き上げる上に、何程か役立つところがあれば、この上の喜びはありません。

創刊号には、詩、創作、短歌、音頭が掲載された。戦中に学校で「チーセン」と呼ばれていじめられ、戦後に朝鮮人の仲間と弾圧反対運動をして臍首される少年を描く、赤馬とおるの創作「チーセン」。「今朝職安の前で若つかもんがたおれたげな」「やつぱりよかもんば喰わんけんばいのう」といった労働者同士の会話が交わされる、うちのしろうの詩「昼飯時」。ハンストをテーマとする、ひごじんの短歌などである。発行日は六月二十一日だが、掲載詩のはやま・みきお「強い草達の歌」の末尾には「1952・4・20」とあり、二ヶ月前には原稿募集が行われたものと思われる。ではこのようなサークル誌「芽だち」を発行していたのはいかなる集団だったのか。二号には「めだち仲間の会のきまり」が掲載



「芽だち」(1号、1952・6)

されている。

一、此の会は「芽だち文学サークル」と名づけ、働く者の文学を育てます。

一、機関紙「芽だち」を発行し、合評会、研究会を開きます。

又書籍の輪読を常時行い、他サークルとの連絡助合いをし
ます。

一、このサークルには働らく人であれば誰でも入会出来ます。

一、入会した人は、当分機関紙を受取った時年会費一ヶ月一〇円を納める外、会の発展のために活動します。

一、この会の運営を円滑にするため、世話係として、編集、連絡、会計各若干名をおきます。

一号と二号は、数枚の紙を折りたたんだ新聞のような形だが、三号からは冊子になり、創作だけではなく作品評も掲載されていく。三十八号（一九五九年八月九日）で終刊。ガリ版の雑誌である。発行責任者（五号より明記）は、長崎市炉柏町二二内野四郎で、終刊まで同じ。「内野四郎」の本名は中村新七。筆名は他に「新井八郎」「八郎」を用いた。中村は一九三九年の第二次ノモンハン戦に戦車兵として参加。四二年満期除隊、五月に帰国、香焼町・川南造船所に勤務。四五年八月九日の原爆時には香焼にいた。妻シヅエは城山町にあった自宅で被爆するも無事だった。中村は四八年に県庁・農地部開拓計画課に就職するが、翌年人員整理により臍首。五〇年頃から失業対策事業で働く。シヅエは「新井しず」「新井しづ」の筆名で「芽だち」に寄稿している。「芽だち」の会費は月十円だったが、財政が逼迫し後に二十円になった。約二〇〇部を刷って配布。公安当局にマークされないよう会員は

筆名で投稿し、また会合でも常に筆名で呼び合っていたため、中村であっても当時の仲間の本名は現在でも分からないという。

毎月二回、発行所の中村さんとこの二階に集まった。一回は作品批評や編集会議、一回は会員拡大などの組織活動。多いときは二十人くらいは集まるし、二百名の読者は即会員でもあったわけです。そして仲間の大部分がそれぞれ戦争体験、被爆体験をもち、生活的にも追いつめられたところでペンをとっていた。(田川実の発言、「座談会 長崎・反原爆表現運動の軌跡―「芽だち」の歩みとその後―)

「芽だち」には詩、創作、短歌、俳句、作品評が掲載されるが、その内容として、労働や暮らしにおける貧困、その改善を目指す組合活動を扱ったものが多い。各号の巻頭言、編集後記では独立と自由と平和のための闘いが呼びかけられている。原爆についての作品も創刊号から発表され続け、毎年八月頃に刊行する号では原爆特集が組まれた。中村、山田、田川をはじめ、被爆を経験したメンバーは少なくなかっただろう。

2

本稿で見るのは、労働者による反原爆の表現、山田かんの詩人・批評家としての出発、「芽だち」以後の展開である。

まず、「芽だち」における原爆についての表現だが、「十字架」や「長崎の鐘」のような言葉をもって語るのではなく、「仕事や生活の窮境に見られる、現在進行形の原爆の問題を描こうとする。初期のものでいくつか例を挙げよう。うちのしろう「がま」(一

号)では、失対労働者の「ヒナさん」が、復興事業で道路を作る仕事の中に、ツルハシを蝦蟇の体に打ち込んでしまう。「だが、いたいたしい重傷を受けたのはガマだけでなくヒナさんであり、それをとりまく人達だった。『人間じゃつたらもう駄目ばい』／しゅんかん、原爆をうけて、妻が子が夫が、いや何万の人達がのうちまわったあのろわしい六年前の情景が人々の脳裏をかすめ、又それゆえに今なお苦しみを続けている人達の感情が共に打ちひしがれたものへの同情としてガマの上にそそがれた」と、目の前の蝦蟇の姿に原爆の記憶を重ねてしまう労働者／被爆者を描く。峽草夫「墓地にて」(三号、一九五二・九)では、ケロイドを隠して生きる律子が「まるまる七年経った今やっと、復興しかけてきた街の、家並を見た。広い、白々と真直ぐに通った道路。／すると彼女は、それに飛行機の滑走路を連想した。すつかり身にしみ込んでしまった戦争への恐怖なのだ。」「港につき出ている赤茶色のガントリクレーン。あの造船所ではまた、軍艦と魚雷をつくるのだという――」ように、復興する長崎の街に、終わらない戦争の気配を感じ取る。こうして現在の生活の問題と原爆の問題とが地続きになるような表現が特徴的である。また、一九五三年頃、被爆者や引揚者などが長崎市内に戦後作っていたバラック街が解体されているが、当時の状況が「芽だち」の詩(新井八郎「家屋撤去」「たちのき」、十二号、一九五三・七)や創作(むらやま・たかし「崖の下」、十三・十五号、一九五三・八一十)に描かれており、その記録的側面も無視できない。

「芽だち」に発表された原爆に関する詩のいくつかは、大原三八雄・木下順二・堀田善衛編『日本原爆詩集』(太平出版社、一九

七〇・六)にも収められた(以下、同書における掲載順)。

●横博「親子」(三十一号、一九五六・八)

●峽草夫「写真の中の友」(二十一号、一九五四・八)

●うちの・しろう「傷痕去らぬ君と共に」(十三号、一九五三・

八、ただし再録に際し中村新七に変更)

●島明子「ケロイドは永久に癒えず」(二十六号、一九五五・八)

●山村好一「明日への歌」(三十一号)

●黒岩鉄雄「怒りの夜」(十三号)

これらの詩がともと掲載されていたのは、十三号(特集名はないが関係作品多数)、二十一号(原爆記念平和特集)、二十六号(原水爆反対特集)、三十一号(原水爆禁止特集号)と、すべて「芽だち」の原爆特集号である。雑誌刊行のペースが遅れる後期(一九五五年以降)においても、「この、八月にお届けする『芽だち第三十六号』は、当然のことながら、原爆の祈念をこめて編まれた。」(『編集後記』、三十六号、一九五八・八・九)と、八月九日へのこだわりを持続させている。最終号もまた八月九日の日付を持ち、「芽だち」というサークル誌にとつて原爆は大きな意味を持つていた。なお、峽、うちの、島、黒岩の作品は、『日本の原爆文学13 詩歌』(ほるぷ出版、一九八三・八)にも再々録されている。

『長崎・詩と詩人たち』において山田は、「芽だち」の運動と永井隆の言説とを比較してみせる。山田は永井の「気合」(「この子を残して」所収、大日本雄弁会講談社、一九四九・六。本稿での引用も初版に拠る)という文章から次の言葉を引用する。

(「人類の多くの者」は一引用者注) 脚に汗しているじやないか? 腕に汗しているじやないか? 労働は神聖だという、

それはいい。労働といえれば筋肉労働が主だと大衆は考えている。そして腕をまくり上げていばつてゐる。彼らは衆をたのんで、脳を汗する者の値打を引下げようとする。(略)筋肉労働者の独裁とは、知恵と自由意志をそなえた人間にとつて、なんと縁遠い言葉ではないか? 人間が人間らしい生活をするとは、この知恵と自由意志とを天主の御意に従つて正しく用いることだ。(略)あのピカドン一発で人類は居眠を覚まされた。これから人類がその興えられた知恵と自由意志とを正しく用いて、隠された資源を次々探し出す時代になつたのだ。知恵が勝ち、腕力が正当な地位まで後退する時がきている。(『この子を残して』一九四一―一九五頁)

山田はこの永井の言説に「例の独善的エリート意識が赤裸にあらわれている文章」として、労働者に向けられた侮蔑的なまなざしを厳しく批判する。そして、「労働者大衆のなかの真実の文学表現を求めている人々」によるサークル誌「芽だち」は、「直接生活にかかわる対立物へのプロテストに主体をおいた文芸活動」として「長崎として戦前戦後の時期を通じ初めての運動体」だった(『長崎・詩と詩人たち』五十三―五十四頁)と評価した。「芽だち」において直接永井隆の言説を批判するような詩歌や散文が書かれたわけではないが、労働者による反原爆表現という運動そのものが永井隆言説批判になつてゐるという山田の指摘は鋭い。後年は、「みんなへたくそ万歳ですね。非常に観念的な革命の煽動詩みたいなものが多いですよ。戦前のアジテーション・プロパガンダ詩から一歩も抜けでない」(「記憶の固執……山田かん氏に聞く」と否定的だが、山田がかつて永井批判の文脈において「芽

「だち」を評価したことは改めて注目されてよい。

3

前掲の「山田かん年譜」によれば、山田は一九四八年頃から詩作を始めていたようだ。同年譜にある作品年譜は『いのちの火』を私家版で出した一九五四年から始まっている。「山田かん」という詩人の出発はここにあるのかもしれないが、それに先立つ「芽だち」での表現活動が持つ意味は大きいと違いない。詩作を始めたばかりの山田にとつて「芽だち」は、作品を発表できる数少ない場であり、他の作品を批評する場であり、自作に対する批評を受け、それに応答していくような場であった。そこには議論を厭わず、相互批評によってより高い文学表現を目指す姿勢が見られ、その姿勢は以後の活動にも貫かれていられると思われる。

山田の作品は三号から登場する。その際「池井晨朔」の筆名で発表している。山田は「池井朔」という筆名で発表していたと振り返っているが、厳密には七号（一九五三・一）までは「池井晨朔」を用い、その次に詩が掲載された十六号（一九五三・十二）からは「池井朔」を「芽だち」では用いるようになった。三号に掲載された詩は「あの夜月が出たならば」と「今宵名月だ」の二篇だが、前者では「原爆」の語が現れている。

月わ青さめる時もあるだろう／原爆がモルモット実験に使われた日／あの夜月が出たならば／累々たる屍の上にあおぎめていただろう／太陽は滴る血の色を／翌朝わたし達に見せてではないか

その後も、精力的に詩や批評を発表するが、山田の詩に対する誌上での反応は、難しい、分かりにくい、分かるように書いてくれ、といったものであった。たびたび掲載されるこのような反応に対して山田は反省もし、また反論も加えていく。

ぼくたちの雑誌の性格としては、なかなか一堂に集って批判学習し合う事ができない状態だと推察するが、この欠陥をいくらかでも補うため発表された詩について、読者は勿論批判を寄せていた。ぼくは、発表した人は是非次号で相互批判し合う事を提言する。ぼくたちが詩を一つの闘いの武器として完全なものに磨き上げるためには酷烈な大衆批判の他にその方途は考えられないだろう。それは特に「芽だち」の詩として一刻も猶予ならない。

（池井朔「詩を武器とするために」、二十号、一九五四・七）

池井さんの詩は難かしい。特に十九号の『死んだ男の背景』などは難かしい。職場の「芽だち」の仲間何人かに聞いてみたが『よく判った』という者はいなかった。

（白石二郎「言葉と感動―池井さんの詩をめぐって―」、二十号）

二十号の「言葉と感動」にゆき当った時、ぼくは「ああ、やっぱり」と口に出してつぶやいてしまった。意識内でかすかに予想していた事、心にわだかまっていた事が明白に、そこには提出されていたから。（略）その作品は読めない、そんなものは読んでもらえぬだろう。感動をもたらす詩精神の昇華が片鱗も見えてとれぬから。そしてぼくは、ぼくがその事

をこの批判以前に知っていたことをはずかしいと思う。二十号でかいた僕の詩評の内部、それはぼくだ。

（池井朔「二つの読後感」、二十一号、一九五四・八）

氏の批評は、一つの見方の上からの批評ではないだろうか。機械論的な割切った見方を排除し真実の創造と抵抗をせねばならない作家に発見の新しい芽さえつんでしまうのが機械論的な作品評のオチではあるまいか。（米原秀二「簡単な疑問（池井氏の批判に答えて）」、二十四号、一九五五・二）

池井さんの詩の難しさは激しい感動を呼びおこすために鋭く現実を描き、その中にひそむ本質をえぐり出す努力をせずに、単に現実を描くのに用いる言葉だけをあれこれ細工して、それで感動をおこそうとするとところにあるのではなからうか。（ハシモト・ナオシ「池井さんの批判に答えて」、二十四号）

ペロペロとかニタニタとかドロドロという一連の表現、これは対象をイメージとして読者に把握させる前に、その様なギ声を乱発する事によって自身が、対象から遠ざかってしまっている感じですし、対象を描出するのにリアルな手法ではないと考えます。（池井朔「書簡のかたちで―黒岩さんへ―」二十七号、一九五五・十二）

一九五五年三月一日には長崎文学懇話会「地人」が創刊し、山田もこれに加わった。「山田かん年譜」（前掲）には「詩誌『地人』とあるが、誌面には詩だけではなく、評論や小説も多く掲載され

ている。山田も、「ぼくもこの創刊に参加したが、サークル誌ではなく、所謂「文学同人雑誌」に加わったのはこれが初めてであった。」（『長崎・詩と詩人たち』八十八頁）と述べており、詩誌やサークル誌というより「文学同人雑誌」といった方がふさわしい。

「地人」では「山田かん」の名で作品を発表している。下野孝文・横手一彦によって『『地人』総目次』（敍説Ⅱ・02）二〇〇一・八）が作成されており、近年では畑中佳恵が「約三年の短期間ではあったが、長崎原爆をめぐる言説を多く発信し、新たな表象を生み出すための積極的な発信が行われた雑誌であった」として、評論や詩の分析を試みる（『原爆文学研究』6、二〇〇七・十二）など、再評価が行われている。「地人」についてはここでは論じることをしてないので、詳しくはそれらを参照していただきたい。

また山田は九州サークル研究会発行の「サークル村」にも詩を寄せている（創刊号、一九五八・九。第二巻第七号、一九五九・七）。当時は振り返り、「私的なことをいえば、ぼくも勤務の変更による事情もあつてこの頃はほとんど作品が書けない状態にあり」（『長崎・詩と詩人たち』一三五頁）と述べるが、この年は、図書館総務課（一九六〇年に図書館新館完成）への異動があり、仕事が多忙になつてしまったことが原因のひとつとして考えられる。一方「芽だち」は、一九五九年八月九日、三十八号で終刊する。

先に見たように、山田は労働者による文学表現として「芽だち」の運動そのものが永井隆言説批判になつて指摘した。「芽だち」に掲載された詩や創作や評論の中で、永井隆のいわゆる浦上燐祭説に対する直接的な批判はなかなか見当たらない。二十六号の「原水爆反対特集」の巻頭言「原爆十周年と芽だち三周

年にあたって」では、「思えば、十年前の敗戦以来、この侵略戦争に責任を負わねばならない者達自身の口から、一億総ざんげのかけ声が下され、さらに、原爆は、思い上った日本人に神が下したいましめ、神の洗礼と宣言されたのでした。(略) 神に代つて、日本人の頭上に『洗礼』を浴びせたアメリカ占領軍は、神の使者にふさわしく、この日本に天上の樂園を作つてはくれませんでした。」という記述があるが、批判の矢は日本やアメリカの指導者たちに向けられている。三十一号(一九五六・八)の「原水爆禁止特集号」に掲載された黒岩鉄雄「人間抵抗の原爆文学創造のために」には次のような一文が見える。

被害都市長崎において、また万人の胸に迫るような、原バクへの抵抗文学が生れてこないのは、なにも書き得る作家がないからではない。ジャーナリズムの関心が広島に集中したためでもない。ジャークはなれてくるためでもない。伝えられる南国人特有の樂觀性にあるのでもない。長崎人特有の性格にあるのでもない。／問題はもつと根ぶかい長崎の歴史的特殊性であり、さらに正確に言えば、日本の国民生活の中に根づく植えつけられている前近代的思考の様式であり、帝国主義的植民的世界観に毒された抒情の様式であると思う。／原爆が、神の摂理ではなく、衆知のようなきたならしい意図のもとに落されたということ、侵略者が、ひたかくしにかくしているこの意図を見抜き得ない歴史への科学的意識の欠如、こうした封建的遺物の思考様式こそが、いまだに万人の胸をゆすぶる抵抗文学を生み出し得ないでいる原因の一つではなからうか？

問題は、映画「長崎の鐘」の製作にあらわれているように、長崎においては、原爆への抵抗を神の摂理へと解消せしめんとする支配者の力が、まだく強いということ、あわよくば「アトム長崎」を売つて、觀光買値を高まらせようとする権力が、支配の座にあぐらをかいているということ、そして、このような輩を許している民主勢力の弱さが、まだく克服されないでいるということ、ただそれだけで、両市の間には、本質的違いはないと思う。

ここではより具体的に「神の摂理」への批判がある。ところで、「地人」四号(一九五五・八)は原爆特集を組み、「原爆文学について」のアンケートを実施し、林田泰昌はアンケートのまとめとして「原爆文学を阻むもの」を執筆していた。

以上、私は長崎の歴史を通過して長崎人の特殊性をみてきた。キリスト教、儒教、仏教などによる宗教的思考の方法は長崎人の精神生活の根底に根づくよりのこり、科学的世界観というものの定着がいちじるしく阻止されてき、まだげんに阻止されているというのがその結論である。(略)／あまりにも前近代的な抒情性(略)それが短歌、俳句、川柳などの旧い文学形式を墨守させ、新しい文学形式による新しい、世界の認識と人間の形象をさまたげる。

原爆文学が長崎に可能であるとすれば、やはりそうした態度を揚棄し、勇敢に、そうした長崎の固有性とたたかう人によって可能であろう。つまり悲劇の哀傷に惑溺せず、原爆の

惨禍を神の試練であり、払うべくして払った犠牲性であるところまかしてしまふ偽瞞、悲痛な体験をもつて自他に甘えようとする卑劣さ、悲劇を文学的に潤飾し美化し悲劇のヒーローあるいはヒロインとして自己を売ろうとする安易さ、そうした態度を払拭し、大きな歴史の一環として悲劇を科学的にみつめ、すんごうの偽瞞も許さない態度こそが、本格的原爆文学出現の第一の要件である。

黒岩は「地人」にも参加し、同人一覽では林田と黒岩は別記されるので、彼らは同一人物ではあるまい。黒岩の同文には、林田の「新しい民族叙事詩の萌芽(その一)―原爆文学への期待―」(「地人」四号)からの引用も見られる。黒岩は「地人」四号の林田の文章を読み、その後「芽だち」に自身の原稿を書いたのである。林田の言葉は黒岩の言葉に摂取されているのである。

また、「地人」五号(一九五五・十)の、柏崎三郎「茶番劇の系譜―永井隆の意味するもの―」では、はつきりと「聖者・永井隆」批判が行われ、昭和天皇―永井隆の「茶番劇の系譜」が指摘されている。

ベストセラーは作られた。商業ジャーナリズムを通して浦上の聖者にまつりあげられた永井隆は、巧妙な傀儡師たる日本の支配者の引く糸のままに、原子爆弾の真実の意味をかくすイチヂクの葉として、処女作を一応オアズケにしたまま、大量に日本国民の中にその屈辱と虚偽の書を、もちまえの感傷主義に色どりながらバラまいて行ったのであった。

「二度目の茶番劇」の系譜は、かくしてつくり上げられた。

／それは「……世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻リニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ継続セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス……」という言葉によって、国民を敗戦の真実より遠ざけようとした旧大日本帝国の支配者と、その支配者を「象徴」の地位におし上げて、一度は解放者の偽態を以てたち現れながら、日本国民に対する新たな支配の座についたものの、正に同一の系譜の上に、原民喜や峠三吉の生命を賭して戦った敵の、直系の嫡子としての地位を与えられていたのである。

山田は「地人」十号(一九五六・十)で「長崎の原爆記録をめぐって―その方法を中心に―」を発表した。「地人」四号の原爆特集の感想から始まり、戦後長崎の原爆文学を追いかける評論だが、この中で「感傷主義」で「ロマンティックなキリスト教的叙情」の「永井テキなもの」を批判する。ここには後の『長崎・詩と詩人たち』や『長崎原爆・論集』(本多企画、二〇〇一・三)の仕事に通じる源流を見ることが出来る。山田の言葉はこうした時代のサークル誌のネットワークから生み出されている。山田が批評の言葉を鍛えていった場として、サークル誌の存在は大きい。

4

最後に、「芽だち」以後の展開を見ていきたい。山田を除く同人の実名が判明したものうち、その後長崎の市民運動に携わっていく人物も少なくない(名前の後の括弧は筆名)。

●池野清（須山紀一、須山清）↓画家。表紙絵（二十八号、三十一号）。

●池野巖（野田巖）↓画家。池野清の弟。表紙絵（二十六号、二十七号）。

●大原忠↓サークル誌「なかま」発行責任者。

●権藤菊枝↓短歌。全日自労長崎県支部書記長。「失対事業に生きる被爆者たち―自労の仲間たちと歩んだ歳月から―」（長崎の証言）10、一九七八・七）では、失業対策事業の労働者にたくさんの被爆者がいたことが回想されている。

●田川実（高村洋二）↓詩。編集後記を担当。長崎市心身障害者福祉センター。長崎で被爆。

●千田哲資（ハシモト・ナオシ）↓詩。長崎大学水産学部教授。

「長崎新聞」（一九八五・七・二十八）で「生命をいとおしむ海ガメの産卵に戦争の無意味さをこめた詩」を発表したとあるので、そこから推定した（二十一号、「月夜の砂浜」）。

●中村新七（うちの・しろう、新井八郎）↓長崎市民劇場事務局長。

●中村シヅエ（新井しず、新井しづ）↓中村新七の妻。

●廣瀬方人（堀康）↓詩。長崎の証言の会。長崎で被爆。

●森菊枝↓長崎生活をつづる会。共産党市会議員森正雄の妻。

●森年房（映草夫）↓全日自労長崎支部教宣部長。長崎で被爆。

●山口白雲↓俳句。長崎生活をつづる会。

このような同人たちが集っていた「芽だち」は、他のサークルとも交流をもっていた。

①まずサークル誌「なかま」の存在がある。山田はインタビューに答えて「最初は「なかま」といっておったんですが、何号か

から「芽だち」になりました」（「記憶の固執……山田かん氏に聞く」と発言しているが、「なかま」は、「芽だち」の約一年後、一九五三年四月二十五日に創刊されている。

私達働らく者の文学をつくりましょう。／働らく者の文学、いろいろむずかしいりくつもありましょう。しかし私達は今すぐ自分達にできるもつともかんたんなことから始めたいと思います。／働らく者の中で一番下積みの人間と言われる私達です。きまつた職を持たない者の腹立たしき、悲しき、一日一日のぎりぎりの暮しの辛さ、病気の恐ろしさ、又それだからこそお互いの間に生れる仲間同志の愛情。仕事と家族の暮しの心配で頭が一杯の私達にも、いやそんな私達だからこそ言いたいことを腹一杯言いましょ。書きましょ。こうして育つた私達の文学が私達を守る組合をよりいっそう強くすることにものなるのです。／多くの人達の参加を訴えます。

（「発刊のことは」、「なかま」一号）

同号の長崎自由労組文化部長による「挨拶」には、「芽だち」が創められてから一年余り経ちますが、その間関係者諸氏の弛まない努力によって私達仲間の間に着々と浸透して行ったその業績は見るべきものがあり、大いに評価されてよいと思います。」とあり、また「編集後記」に「芽だちが発刊されて十号、多数の会員の参加により発展の方向に進んでいる。しかし『芽だち』文学サークルが真に闘うための文学であるなら『芽だち』文学サークルがようしている各職場の問題が尚一層深く掘り下げられ、そこから闘いの一步をふみださねばと思ひ職場サークルの結成にとりかゝったのである」とあるように、「なかま」は「芽だち」の活

動から生じた別サークルである。誌面に「芽だち」会員の名前が数多く見え（大原忠、坂尾召太、山春雄、村雨哲郎、松田研一、おやま・くにお、吉坊、佐々木五郎）、「芽だち」が毎月一日発行のところから、『なかま』は今後十五日発行にしてゆきたいと思う」（一）号「編集後記」）、「芽だち」でも「なかま」の創刊を祝い、「今までも「芽だち」は、職安の会員たちの作品が一番多かった」（「編集後記」、十一号、一九五三・六）と述べるようにつながりは深い。「対人夫」の「生活の苦渋」の原因を「階級社会の矛盾」に見、「仲間同志の感情」を「反映」させ「共感」を呼び起こし「交流」していくための創作が望まれていたが（挨拶）、創刊号のみ確認できただけで、その後は未詳である。

② 「芽だち」四号（一九五二・十）の「サークルニュース」には「仲よし子供会」が活動を再開し、機関誌「なかよし」の編集を「芽だち」会員有志が協力することが伝えられている。現段階で「なかよし」は未見だが、「人民文学」（一九五二・七）には、むらやま・たかし「山の上」が転載され、同号の「サークル通信」に、「原爆第二号を落された長崎市の「なかよし子供会」の機関紙「なかよし」は、「きこりととのさま」、「ぼくのひよこ」などおとぎばなしや綴方などが目立っている。最近は機関紙「なかよし」の外に「なかよし子供会だより」と「なかよしお母さん新聞」を併行して発行しはじめた。」と紹介され、活動の一端が垣間見える。むらやま・たかしは、「芽だち」にたびたび詩・創作を投稿している。①のように、ここでも会員によるサークルの掛け持ちが見られる。

③ そのほか、他のサークル・団体との関わりは、受贈雑誌や通信から窺うことができる。それらを挙げると、前進座（東京都武蔵野市）、福岡人民文学サークル「海峡」、八幡新萌文学サークル「新萌文学」（のちに八幡文学集団「鉱石船」）、佐世保文化研究会「虹」、熊本保養院文学サークル「くわみず」、熊本文学会「熊本文学」（のちに新日本熊本支部機関誌「新熊本文学」と統一し、新熊本文学会「新熊本文学」、佐世保人民文学の友の会「文学させば」、松川事件対策東北地方協議会「まつかわ」、三池合成文化サークル（三池合成労組文化部）「うたごえ」、国立小浜療養所患者親和会文化部「小療ニュース」、文学の友社、人民川柳社、佐賀・しまねき会「望潮」、炭鉱地帯文学会（大牟田市）、大牟田葦会「雑木林」、大牟田自労文化サークル「つどい」、「希望」（大分日田市）、門鉄詩話会（吉塚機関区）、ろんど（吉塚機関区）、大村寮友会「ひこばえ」、佐世保駅友会文芸部、紀元書房（諫早市）、諫早平和グループ「はもん」、智草文芸会（長崎市）、談話くらぶ（長崎市）、長崎文学懇話会「地人」、である。広島グループと雑誌をやりとりしているような記述は見られない。多くは長崎市内、長崎市近郊、九州のサークルである。これら長崎市内外の他のサークル誌における原爆の描かれ方については、今後の課題としたい。

付記 「芽だち」「なかま」「地人」の原本閲覧に際しては山田和子氏にお世話になりました。また、中村新七氏、中里喜昭氏、中原豊氏に取材協力していただきました。記して深く御礼申し上げます。